徒花流

adabana-nagashi

時雨×五月雨

DOJIN
R18
成人向け

例えどれほど純粋な声でも、届かない想いがある。
どれほど強く祈っても、叶わない願いがある。

わーっ！すごーい！

わい・わい

ついにケッコンカッコカリか――――！

こういうの好きじゃないと思ってたけど・・・

スミにおけないんだから～♪

いやぁ

指環の恩恵は大きいからなぁ

誰かしらにはやるンだと思ってはいたが――

五月雨が提督から《指環》を受け取った時のことは

今でも覚えている。

初期艦として
提督に仕え、鎮守府を
支えてきた五月雨

仲間が増えて、
出撃の出番が減った現在も、
自分にできる仕事を
コツコツと積み重ねて…

そんな彼女が――

幸せそうに微笑まなく
なったのは、
いつからだろう？

いつから――

パタン…

失礼しました

あんなに幸せそう
だった五月雨が――

提督執務室

辛そうな微笑みしか
浮かべなくなったのだろう――？

提督が五月雨をイジメてるところ、誰も見てないし？

そもそも――普段、五月雨と提督が会話してる姿もほとんど見てないし――？

たぶん、あの提督は「艦娘（わたしたち）」に興味がない・・・人間の女の子と思ってないのよ

実際、「人間の女の子」じゃないけど――

「指揮官」としては優秀な方ですし――

五月雨から相談でもしてこない限り、周りが勝手に騒いでも・・・

「こればっかりは、ふたりの問題だよ」

五月雨？

…時雨

大丈夫？
拾うよ！
だいじょ…ッ――ですず…
こんな重いファイルや書類をいくつも…
五月雨一人で運んでるの!?
はい…資料室に運ぶように、と提督が――

無茶なことを・・・！
時雨！
これも秘書官の仕事だから――
むっ
それに、こんな重たいの・・・提督に運ばせる訳にいかないよ――
・・・・・。
わかった！じゃあ僕も手伝う！
え・・・っでも――
提督以外の誰かが運べばいい――
そういうことでしょう？問題あるかい？

それとも
――迷惑？

うぅん・・・
ありがとう
時雨

ゴッ
ゴッ

——暗いね
資料室は地下ですから

転ばないでよ？
もうっ
転びませんよ——!!

振動…？
…音？
電気系統かな——？
地下だし？
着きましたよ、時雨！いま電気を…

ああ！

きゃあ！

どたん

ああもう！暗い!!

五月雨ッ！

ぽちっ

だいじょーぶ

…っ!?

ガシャ

え・・・？

さみだ・・・れ？

かぁぁ・・・

つや・・・

ダメぇ・・・

見ない・・・でぇ・・・っ

ぶるっ

ぶるぶる

ぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ぶる

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ぜんぜん
あぶ
ぜんぜん
ぜんぜん
ぜんぜん

いや――
僕が五月雨を
想っている間も

ガクガクガクガク

腰ぶるぶる
動けちゃ
止まらなっ
なんッだこれ

君は…
ひとりで
気持ち良く
なってたんだ――

ちが…っ
なにも
違わない

ぶるっ…
…あ

五月雨が
こうやって提督と
遊んでいるなんて――

かわいい声——

こんな声で
いつも啼いて…
きゅむ
ビクッ
トあッ♡
提督にも
こんな風にして
可愛がって
もらってたんだ？
ふる
ふる
…そうやって
イヤがったふりして
スリ…
ビクッ
少しも
抵抗しない
ビクッ
ぬぬ
ぐ
ゼカル
のは…

本当は好きなんでしょ？
こういうのが・・・っ
すんなり入っていく指
初めてではないやわらかさ——
指に吸いついてくる肉壁とあふれる愛液
ここに毎晩

提督(あのひと)のモノが――

ビクッ

時雨・・・

あぁ

それ・・・

はぁ・・・あぁ・・・

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

僕の方が――

僕の方がずっと――

五月雨を気持ち良くして

やれるんだっ！

ほら――ね？
僕の方が――
ずっと
上手にできる――

だから――

見せてよ
――僕にも

提督とシている時の
――五月雨（キミ）の顔を

――ちガう――

いやらしい
ことをされて
感じている

五月雨の姿を・・・

チガウ！そうじゃナイ・・・！

こんなことを本気で望んでいるわけじゃない――

五月雨にヒドイことなんてしたくない！

それナノに・・・

ごめんなさい提督――

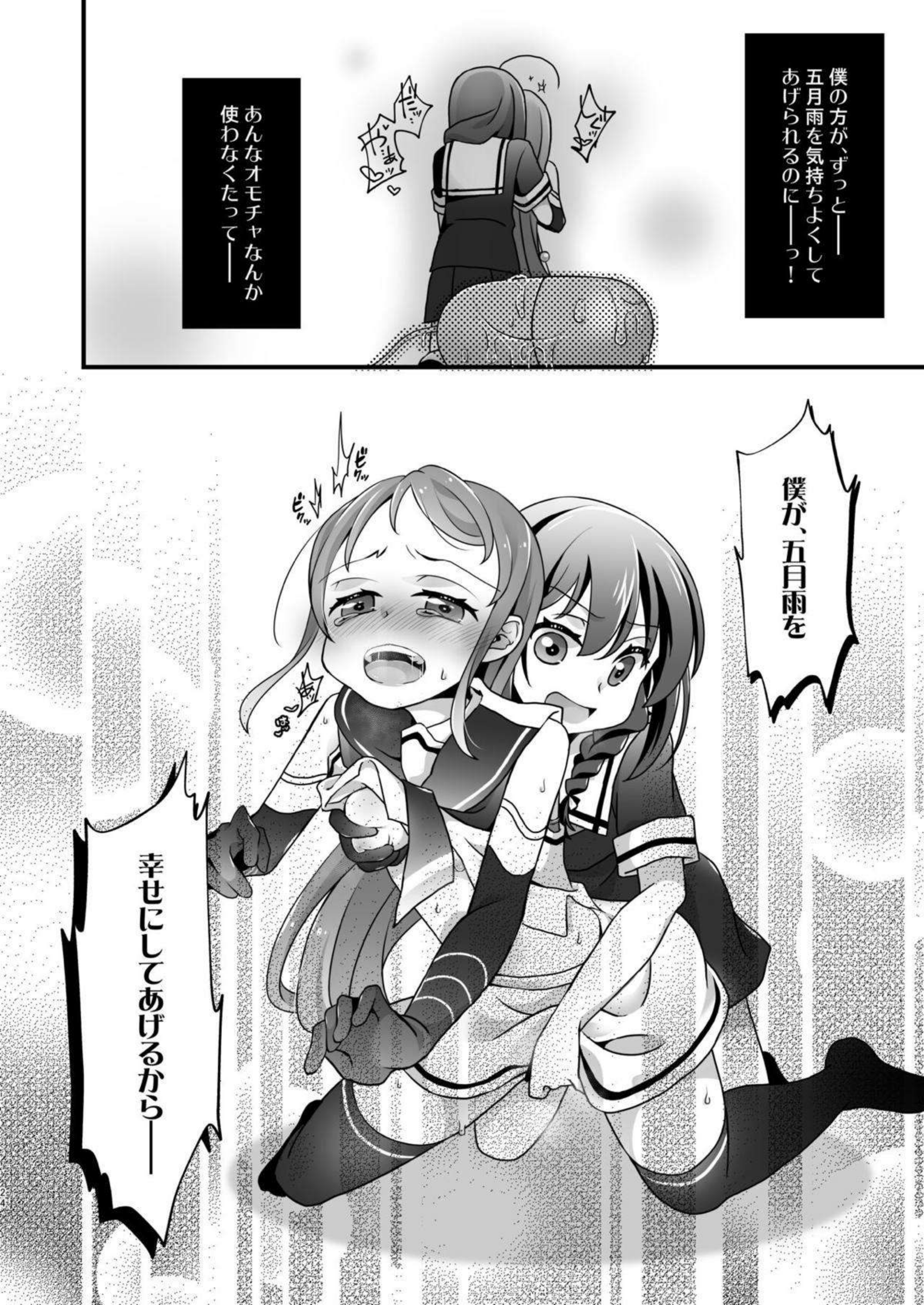
ガバッ

あんな人間のどこがいいの!?

僕の方が――っ！

僕の方が、ずっと――
五月雨を気持ちよくして
あげられるのに――っ！

あんなオモチャなんか
使わなくたって――



僕が、五月雨を

幸せにしてあげるから――

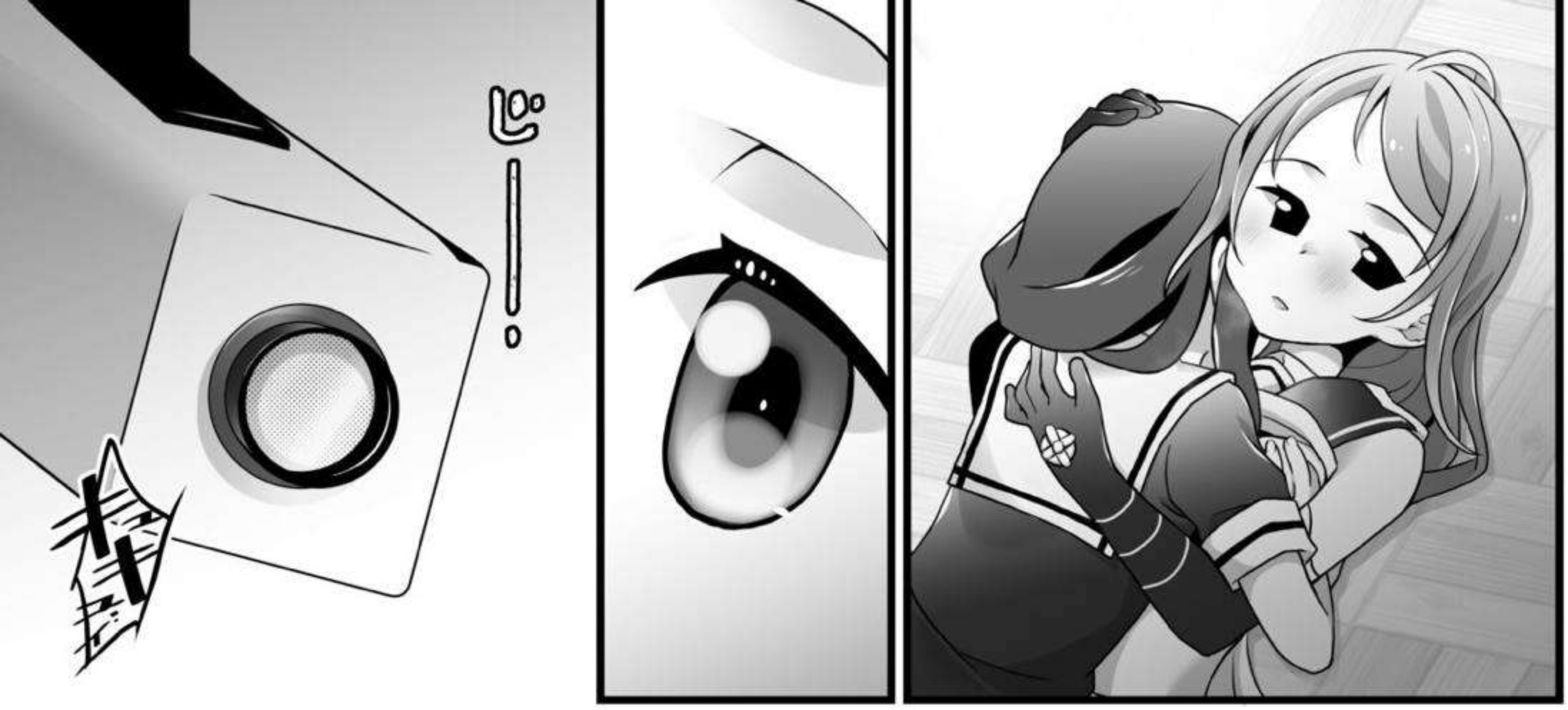
――五月雨？
ありがとう
時雨――でも・・・
ごめんなさい――
――
どうして・・・？

どうして――

こんなにも好きなのに――ッ！

僕だけが

――僕だけがこうして…



コンコン

失礼します
提督――

カチャ

――ご満足
いただけましたか？

……

そうだな…

及第点だ

ほっ

じゃあ…

ご褒美をいただけますよね

提督❤

AMANAGI

書庫の扉を閉める音が、足元の階段から冷たく響くと、涼風は引き結んだ唇に決意の色を滲ませた。

言うんだ。今日こそ。

目を背けずに、ちゃんと――！

「あれ？　涼風？」

地下から階段を登ってきた五月雨が、涼風の姿に気付く。その表情はニコニコと微笑みながら、しかしどこか空虚であり、そのまま立ち止まることなく涼風の前を過ぎ去ろうとした。

「待てよ」

涼風は五月雨の肩を掴んだ。

「書庫で一体、なにをしていたんだ？　あそこの部屋の鍵は、提督が管理してんだろ？」

「うん。そうだよ？　それが答えになってるでしょ？　提督から頼まれて、書庫で資料を探しに行ってきたの」

「だったら！」

目尻を険しくして、涼風は鋭い声を上げた。

「その探してた資料ってのは、どこにあるんだ!?　下に降りる時も手ぶらだったよな!?　それに時雨はどうしたんだ!?　ふたりで一緒に降りていくのを、あたいは見たんだぞ！」

「なぁーんだ。最初から覗いていたんだ」

クスクスと笑う五月雨に、悪びれる様子はない。

「時雨は……時雨はねぇ……」

不意に五月雨は、下から覗き上げるような姿勢で涼風に顔を接近させた。微笑んではいるが、目は少しも微笑んでいない。微笑んでいないばかりか、その焦点は涼風を捉えてすらいなかった。

刹那、涼風は背筋に悪寒を感じた。

「時雨だったら、まだぐったりしていると思うけど？」

「……どういう意味だよ」

「どういう意味も、覗いていたのなら涼風だって本当はわかっているんでしょ？　それでも訊いてくるなんて、涼風ってば結構Ｓだったんだ。知らなかったなぁー」

「変なこと言ってないで、答えろよ！」

「ウフフ。時雨なら気持ち良くなりすぎちゃって、机の上で失神しちゃった。変な顔して、だれも垂らして。何度も何度もオモチャで絶頂して、潮を吹いて、机も床ももうグチャグチ」

「なっ――」

「酷いよね。自分だけ気持ち良くなって、私、まだ一回もイッてないのに。だからそのまま放ってきちゃったの」

五月雨は歪んだ口で、嘲笑を揺らした。部屋に置き去りにした時雨を思い出してか、細い手を自分の股間から臍へ、胸へ、そして喉から唇へとゆっくりなぞる。

官能的に、そして挑発的に、涼風に見せつけるように。

組み替えた脚からふともももをチラつかせ、五月雨は黒いグローブに包まれた中指と薬指を、恍惚とした面持ちで口に食（は）む。そこに滲み込んだ時雨の残り香を、舐め取ろうとするかのように。

「いい加減にしやがれ！」

反射的に涼風は、五月雨の腕を掴んだ。

「なんでそんなことをするんでぇい！　そんなことして、一体なんになるってんだい！」

一体、なにがあったのか。
なんでこうなってしまったのか。
そんな艦娘じゃなかったし、そんな姉妹艦でもなかった。
いつだって前向きで、なにをするにも一生懸命だった。
それがどうして、こうも退廃的になってしまったのか。
「なにが五月雨を、そんな風にしちまったんだよ。あたいの好きだった五月雨は、もっと――ングッ!?」
続けようとした言葉は、しかし五月雨の指によって強制的に遮断されてしまった。ただ口を塞がれたのではない。口の中に、二本の指を挿し込まれてしまったのだ。
「いい加減なことを言わないで、涼風。前向きって、なに？　前向きになって、どうなるの？　一生懸命？　一生懸命だったら、それでなにが変わるの？　ねぇ、涼風？」
五月雨が問う。問いながら、涼風の咥内を指で嬲る。先ほどまで自分の口に含ませ、唾液をまぶしたその指先で舌を撫で、歯茎の裏をなぞり、コリコリと奥歯を引っ掻く。
「なにも変わらないよ？　この戦争は私たちの敗け。人類が敗けて終わるの。それなのに人間たちは私たちだけを戦わせて、自分たちは知らんぷり。そんなのズルイって思わない？」
口元は笑ったまま、すぅっと青い目が細くなる。
「艦娘だって、好きに生きてもいいじゃない。どうせ最後には敗けるんだもの。ニンゲンを――提督を、キモチよくしてくれる道具と思っても、いいじゃない。涼風はそう思わない？」
「んんっ！　んんんんっっっ！」
指を咥えさせられたまま、涼風は必死にイヤイヤと首を左右に振った。股間の隙間には、いつの間にか五月雨のふとももが差し込まれていて、短いスカートを強引に押し上げる。
「涼風もね？　沈んじゃう前に、気持ちのイイコト、覚えた方がいいと思うよ？」
言いながら、五月雨が膝を上げてくる。露わになった白い下着のクロッチの部分を、グイグリと押し当ててくる。
「キモチイイコト、シヨウヨ――」
そうして五月雨は、冷たい声で囁った。
青く輝く瞳の奥に、仄暗く揺れる不吉な瘴気を漂わせて。
涼風は、知っている。これは深海の目だ。深海棲艦が勝ち誇った時に、艦娘を見やる目だ。昏く、深く、冷たい眼差し。だとしたら五月雨は、その心まで、もう……。
「ぷはっ――ゲホッ！　ゲホッ！」
唐突に指が抜かれ、涼風はえづきながら空気を貪った。
どうしてだ。なんでなんだ。わからない。わからないのが、たまらなく悔しくて、瞼の裏から熱いものが滲み出す。涼風は無力な自分を慰めることもできないまま、溢れた滴で床を濡らした。
「じゃあね、涼風。私、提督の所に行ってくるから。今日はまだ一回もイッてないんだもん。提督に慰めもらってくるね」
涼風の唾液で濡れた手袋を、五月雨は美味しそうにねぶった。
止められなかった。止めることができなかった。
(あたいはただ五月雨に、昔みたいに無邪気に笑ってほしいだけなのに……っ！)
床にしゃがみ込んだまま、涼風は嗚咽をこぼした。
五月雨は一度も振り返ってくれなかった。

(終)

2022年夏頃から天凪さんと盛り上がりw
１年越しとなった時雨五月雨本。

ようやく形になりました!!!!!

ごきげんよう。
サークル「とうやとうふ」のとうやです。

天凪さんは控えめに「原案」と言って
くださいますが、私的には「原作者」です。
ええ、もう！天凪さんの意と趣味と性癖を
拾いまくって描かせていただきました♪w

他人様のお話を漫画に昇華するのは
プレッシャーも然ることながらw
新しい扉が何枚も開かれｗｗ
大変だったけどw楽しかったです(*^^*)

とにもかくにも百合Ｈ！
初の試みだったので、まさに試行錯誤w
至らない点が多々多々あると思いますが
今後の**のびしろ**に
ご期待いただけると幸いです。。。orz

天凪さんには、原作以外に
後日談ＳＳも寄稿いただき、感謝感激★
涼風、ありがとうございましたっ！

そんな感じでw一癖も二癖もある
一冊となりましたが、少しでも
お楽しみいただけると幸いです♪

本書と併せて、前日譚となる
天凪さんの小説本(次頁参照)も
一緒にどうぞ♪いろいろ深まりますw

感想等、とうやはもちろん、天凪さんにも！
SNSで気軽につぶやいてもらえると
しっぽ振って見に行きます(＞ｗ＜)b
X……まだ混乱が続いていますがwはやく落ち着くといいですね(しろめ

それでは、また。。。ごきげんよう！

しぐさみはいいぞ～ｗ
特に妹を想う姉の感情が、
実は濁っていると実に良い！
そしてそんな姉の感情を、
もっと濁った感情で受け止める、
曇った雨の瞳とか
最高すぎると思いませんか！？

機会があったら、闇堕ち五月雨
また書きたいですｗなんなら
時雨を調教する五月雨とか(ﾔﾒﾚ

原案担当：AMANAGI/(天凪)

「徒花流し」副読本

2023/08/12発行

2022/11/20発行

サークル「主の本棚」天凪(@midorinagi)の小説本――「徒花流し」前日譚。

おくづけ*

発行元：とうやとうふ[旧:一〇八豆腐店]
発行日：２０２３年８月１２日

X[Twitter]/Misskey：@108_10210
Pixiv ID：59869
Mail：arukarish@yahoo.co.jp

本書はゲーム「艦隊これくしょん」を元とした二次創作作品であり、
実在の人物・団体・事件とは一切関係ございません。
また、如何なる歴史的・政治的主張もありません。

※本書の内容の無断転載・転用・ウェブ上へのアップロードを禁じます。
また、原作ゲームおよび二次創作に理解のない方への提示はお控えください。

とうや
とうふ
一◉八豆腐店